

2022 年 1 月 30 日（日）「サーブとレシーブ」

ガラテヤ 2:19-21（その 2）

19 私は神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストと共に十字架につけられました。20 生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです。21 私は神の恵みを無駄にはしません。なぜなら、もし義が律法を通して得られるならば、キリストの死は無駄になってしまうからです。

【序論】

人の人格とは、日頃ふれているものによって形成されると言われます。私たちの思想は読んだものによって形づくられていきますし、それは言葉や行動にも影響を与えているはずです。私自身も、折々に好きになる作家がいるのですが、気づくとどこことなく文体が似てきている自分にハッとすることがあります。また、特定の説教者の説教を繰り返し聞いていて、いつしか話し方を真似するようになっていくということもあります。読み物や聞く物だけではありません。誰と接しているか、どういう人と心を通わせているかが、良くも悪くも私たちの人格形成の重要な一旦を担います。それだけに、私たちの心を支配しているものが何であるかを認識していなくてはならないでしょう。言い換えるならば、私たちの心の主権、人生の舵取りをしているのが何／誰であるかを問うてみる必要があるのです。

【本論】

先週は 2:19-21 のうちの 19 節だけを扱いましたが、今日は 20～21 節を中心に学んでまいります。パウロの人生の主権者が変わったということがここでは述べられているのですが、かつての支配者と現在の支配者がどう違うのかが今回のテーマです。

本論 1. 主権者の交代

生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。

(2:20a)

本節は 19 節の内容、パウロが「律法によって律法に死んだ」という念入りな表現を用い

て「自分はもはや律法の支配下にはない」と強調していたことを受けています。彼は自らの力で律法を捨てたのではなく、「キリストと共に」律法に死んだのでした。律法による罪の裁きは十字架上で完了してしまいました。キリストの死は、パウロの罪がそこで裁かれたことを意味したのです。よって、律法はもはやパウロを裁く余地を失ってしまい、金輪際何の影響も与えることができなくなっていました。それが 19 節で言われていたことです。

20 節からはむしろ、キリストの復活と関係する内容になってきます。キリストが死より甦ったのは、パウロを新しいいのちで満たすためでした。パウロの「古き人」を道連れに十字架で死なれた主イエスは、今度はパウロを「新しい人」として一緒に死より復活されたのです。これは、霊的に甦るということであって、「神に対して生きる者」になったことを意味します。パウロの人生を支配するものが、まったく変わってしまった。もはや、律法が要求してくる規程に脅え、ガリガリとそれに従おうとし、それでも罪に苦しむ生き方はしなくてよくなった。かえって、律法を守れない者であるのに、それでも恵みによって永久に赦された存在になったことで、まったく肩の力が抜けてしまい、信じがたい自由のうちに歩み始めたのです。パウロの内側から湧き出る「新しいいのち」は、彼に感謝と喜びと平安を与えていました。

キリスト者は皆、パウロのようになることができます。彼が経験したと同じことが私たちの内側でも起きてくる。福音を理解すればするほど、身も心も軽くなっていくのです。信仰生活で何よりも大切なことは、福音に生きる自由に満たされることです。自分の人生の主権者が決定的に入れ替わったことを全身全霊で受け留めていく必要がある。如何なる奉仕にも先立って、私たちの魂が解放されることが不可欠なのです。自分の罪がことごとく赦され、もはや律法に支配されない存在となったこと、支配権がキリストに移ったことを告白し、その恵みを与えてくださった主を誉め讃えることが信仰生活の原点です。礼拝に行くのが本当に「嬉しい」「楽しい」ものでありたい。奉仕の業は、抑えきれない感謝によって溢れ出てくるものなのです。

本論 2. 愛されたからこそ

私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子の真実によるものです。(2:20b)

「肉において生きている」という表現は、パウロの地上の生涯を指すと思われますが、今やその導き手が律法からキリストに取って替えられました。この新しい導き手について「私を愛し、私のためにご自身を献げられた」と言われている点が重要です。世の常で

は、何らかの支配権が振るわれるとき、一般的に以下のようなケースが多いでしょう。

- ①暴力的支配に対して、恐怖心から従う
- ②合法的に従わなくてはならない環境となっている
- ③報酬の約束を受けて、命じられたことを実行する

下に行くほど主従関係は健全性が増していきますが、罪の世にあってはどうしても、「従」の側に不満や屈辱感といったものが付きまとうことが多い。しかし、パウロはここに第四の道を呈示しているのです。それは、「主」の側が自ら「従」に対して仕えてくださったということです。主イエスがパウロを愛し、彼のためにいのちを捨ててくださった。そして、彼の内に住み、働きかけ、屈辱感などとは無縁の感謝と喜びによって神に従うことのできる存在へと造り変えてくださったのです。

私は高校3年生まで卓球をやっていましたが、ゲームで使われる用語が福音的であることにふと気づいたことがあります。ボールを持っている側が「サーブ」し、相手は「レシーブ」する。「サーブ (serve)」とは「仕える」ことであり、「レシーブ (receive)」とは「受け取る」ことです。勝負の世界では、如何に相手を取りにくいサーブを出すか、打ち負かすかというところにばかり目が行ってしまいますので、この言葉の意味はほとんど失われていると言ってよいでしょう。しかし、おそらく、どの球技においても、当初は人と人が交わり、ゲームを楽しむために考案されたスポーツであったと思われるのです。そこで、「じゃあ、僕がサーブするね」「あなたがサーブしてくれたものを私がレシーブするね」と、笑顔で親しみ楽しむことが始まりだったのではないかと、私は想像しています。

主イエスはパウロに「サーブ」してくださった。パウロはその愛を「レシーブ」したのです。主イエスのサーブは、対価を求めるものではなく、まさしく無条件の愛、何の邪心もなく、偽りも欲望もない、まことに純粋な愛の業でした。これは、神の子であったからできた業です。罪ある人間にはどこか不純な動機が入り込みますが、主イエスには無私の愛をささげることがおできになったのです。

「**神の子の真実**」という表現は、原文では「神の子の信仰」です。この表現は 2:16 でも出てきましたが（イエス・キリストの真実〔信仰〕）、新改訳では理解しやすくするために「イエス・キリストを信じる信仰」と意識されています。言わんとしていることは「主イエスの十字架を通して現された神の恵み」であり、愛のイニシアティブと愛のレスポンスというまったく新しい関係性がこの世にもたらされたことを言い表しています。これだけのことをしてくれたから、相応の報酬を支払いますというような話ではありません。何もしていない者に一方的にプレゼントが送られ、その喜びに突き動かされるようにして愛を返していく。それがキリストと信者の関係なのです。

本論 3. 主の愛を無駄にはできない

私は神の恵みを無駄にはしません。なぜなら、もし義が律法を通して得られるならば、キリストの死は無駄になってしまうからです。(2:21)

ここでパウロはチクリと加えます。ガラテヤ教会内で割礼の必要性を訴えている人々に対し、それはせっかく主イエスが出してくださったサーブをレシーブしないことだと。

卓球でも、テニスでも、バレーボールでも、レシーブしてくれる相手がいるからこそゲームは成り立つものです。私が卓球を始めたきっかけは、父と兄が毎週水曜日に卓球をしに多摩市総合体育館に行っていたことだったのですが、その影響で私も小学校の卓球クラブに入りました。成長し、兄と二人でよく練習をするようになりました。兄がいないときは、素振り、サーブ練習、壁当てくらいしかできないもので、球を打ち合える相手がないもどかしさを感じたものです。

主イエスも、ご自分が出されたサーブを受け取ってくれる相手を求めておられるでしょう。ちゃんと打ち返してくれて、ラリーが続いていくからこそ、ゲームは楽しくなるのです。レシーブが返ってこない、話になりません。

ガラテヤの信徒たちが割礼を受けるということは、差し出された恵みに対して「俺にはそんなものは必要ないよ」と言って、どこかへ球を放り打ってしまうようなものです。そして、一人で壁に向かって練習をして行く。自分を愛してくれる相手なきままに、自分だけのゲームを構築する。神との愛の交流がない。愛に対して愛をもって応えていくことが欠落した「信仰生活」が積み上げられていきます。

パウロは言います。「義はもう与えられたのだ」「あなたがたはもうがんばる必要はないのだ」「主イエスの愛に応えていけばよいのだ」。福音は人を律法の縄目から解放し、楽にするのであって、義とされてしまった人が「さて、じゃあどのようにしてイエス様の愛に応えていこうか」という積極的な姿勢で応答していくものです。私たちの礼拝に臨む気持ち、奉仕に臨む気持ちが「義務感」から出ているものであるとするならば、救いの本質が見失われているかもしれません。だから、私たちは絶えずキリストの愛を知り続ける必要があるのです。その愛の深みは、一生かけても知り尽くすことはできないでしょう。

コロナ期に入ってから、私は毎週の聖書の学びと祈りの集いのために詩篇とハイデルベルク信仰問答から隔週でショートメッセージを作成するようになりました。それは、自分が主の愛をより深く知っていくためであり、信徒の皆様にもそれを分かち合うためでもあります。愛されていることを知るとき、私たちは愛をもって応えるということができるからです。

【結論】

私たちの人生の主権者は、もはや冷たい規則ではありません。「私を愛し、私のためにご自身を献げられた神の子」に主権は移されたのです。この方が聖霊によって私たちの内に住み、更に恵みを理解できるように導き、喜びに溢れさせ、キリストの愛に応えうるものとしてくださっています。「学ぶ」ということも、義務感によってではなく、もっと主イエスの愛を知りたいという願いから出てくるものでしょう。サーブとレシーブの関係を主と共に築き上げ、人生の終わりまで、いえ、永遠に楽しいラリーを続けていきたいと思います。

【祈り】

私たちに自ら仕えてくださったイエス・キリストの父なる神様。人間は無償で受け取るということが、時に苦手な存在です。こんな自分がタダで受け取れるはずはないと感じてしまうのです。しかし、福音はあくまでも受動的な姿勢を求めてきます。私たちが全く力を抜いて主イエスの愛を受け取ることが、救われるために不可欠な姿勢です。律法に生きてきた者にとって、この新しい生き方に切り替えることは簡単ではありません。聖霊の助けと導きが必要です。再び自ら縄目に縛られる道を選ぶことがないように、常にお守りください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
罪と律法の奴隷として生きていた者に、新しい主権者としての御子を遣わし給うた、父なる神の愛、
自ら仕える者となり、「罪の赦しの福音」というサーブを投げかけ給うた、主イエス・キリストの恵み、
出されたサーブに、全身全霊をもってレシーブさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。